

## エステル記 4 章

### エステル記 4 章の背景

#### エステル記

前回の学びはエステル記 2 章で、その後どうなったかざっと見てから今日の本題の 4 章へ進みます。

#### 3 章

1,これらの出来事の後、クセルクセス王はアガグ人ハメダタの子ハマンを重んじ、彼を昇進させて、その席を彼とともにいる首長たちのだれよりも上に置いた。

「これらの出来事の後」というのは、2 章の終わりの方で起こった、王の二人の宦官の謀反がモルデカイのタレコミによって、事実が明るみに出て、二人が処刑されたという出来事。

聖書の中で、「これらの出来事の後」とあれば、それが何か要チェック！これからの話の展開の鍵を握っている可能性が大。

ハマ登場の背景には、このようなクーデターの動きに不安を感じたクセルクセス王の自己防衛本能が見え隠れする。

ハマとは何者？

「アガグ人ハメダタの子」

ハマ(Haman)は、[ヘブライ聖書「エステル記」](#)に登場する人物である。[ペルシャ王アハシュエロス](#)の宰相であり、[ユダヤ人](#)の敵として描かれる。名前は「堂々とした」「立派な」の意味である。

ウィキペディアより

ハメダタの子で、「アガグ人 [Agagite](#)」(エステル記 3:1、10、8:3、5、9:24)。「[サムエル記](#)」上 15 章を参照すると、彼が[キシユ](#)の子サウルの敵であった、[アマレク人の王アガグ](#)の子孫であったことを思わせる。

キシユの家系に属する王妃[エステル](#)の養父であった[モルデカイ](#)が、自分にひれ伏さないことに腹を立て、帝国内のユダヤ人を全員殺害するという勅書を送り、特にモルデカイのためには死刑執行の柱を用意した。

しかしエステルの介入によってこの計画は未遂に終り、彼は自ら用意した柱にかけられ、息子ら 10 人も殺された(エステル記 [7:10](#)、[9:10](#) 参照)。

ウィキペディアによると、アガグ人はアマレク人の王アガグの子孫ではないかと言わ

れている。じゃあ、アマレク人って誰？

エサウの孫にアマレクがいた。(参考)創 36:12 ティムナはエサウの子エリファズの側女で、エリファズにアマレクを産んだ。これらはエサウの妻アダの子である。)しかも、イスラエルの民が荒野をさまよっていた時に、度々アマレク人から攻撃を受けている。更にサムエル記 15 章では、神はサウル王にアマレク聖絶を命令。( I サム 15:1 サムエルはサウルに言った。「【主】は私を遣わして、あなたに油を注ぎ、主の民イスラエルの王とされた。今、【主】の言われることを聞きなさい。

15:2 万軍の【主】はこう言われる。『わたしは、イスラエルがエジプトから上って来る途中で、アマレクがイスラエルに対して行ったことを覚えている。

15:3 今、行ってアマレクを討ち、そのすべてのものを聖絶しなさい。容赦してはならない。男も女も、幼子も乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも殺しなさい。』」

で、サウル王がどうしたかと言うと・・・

神からの命令を守らずに、惜しんで聖絶しなかったことが分かる。(参考) I サム

15:9 サウルとその兵たちは、アガグと、肥えた羊や牛の最も良いもの、子羊とすべての最も良いものを惜しんで、これらを聖絶しようとしなかった。ただ、つまらない値打ちのないものだけを聖絶したのである。

15:10 【主】のことばがサムエルに臨んだ。

15:11 「わたしはサウルを王に任じたことを悔やむ。彼はわたしに背を向け、わたしのことばを守らなかったからだ。」それでサムエルは怒り、夜通し【主】に向かって叫んだ。」

そこで、あの有名な聖書箇所が出てくる。(参考) I サム

15:22 サムエルは言った。「【主】は、全焼のささげ物やいけにえを、【主】の御声に聞き従うことほどに喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。

15:23 従わないことは占いの罪、高慢は偶像礼拝の悪。あなたが【主】のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた。」

神は、サウル王に対し、「従わないことは占いの罪」「高慢は偶像礼拝の悪」と言われた。ここで、根絶やしにしておけばよかったのに！・・・私たちは後智慧でわかるけれど、なぜ神がサウル王に王位から退ける程厳しかったのか、わかる気がする。ずっと後の子孫がイスラエルの民を皆殺しにしようとすることを神はご存知だったからであろう。それにしても、めちゃくちゃ因縁が深い。そもそもエサウの子孫だから、ヤコブとエサウの時代からの因縁だ。

ここで面白いのは、サウル王はベニヤミン族出身。モルデカイは？そうモルデカイもベニヤミン族出身。何百年も後に因縁対決を迎えるとは、神の采配、摂理は人間の理解を超えてすごい。

クセルクセス王は、2 章の終わりで起きた暗殺未遂のせいで、おそらくは不安になり、誰かを頼りにしたくなつたのであろうが、よりによって、この「アガグ人ハメダタの子ハマン」を重んじてしまう。しかも、その重んじ方と言ったら・・・「昇進させて、その席を彼とともにいる首長たちのだれよりも上に置いた」だけでなく、3:2によると、「それで、王の門のところにいる王の家来たちはみな、ハマンに対して膝をかがめてひれ伏した。王が彼についてこのように命じたからである。」何と、ハマンを拝む命令を出してしまった。

しかし、モルデカイは王の命令を完全に無視して、膝もかがめずひれ伏そうともせずにいる。ユダヤ人であるモルデカイは、神以外の何をも拝することができなかつたし、しなかつたからだ。

3:6で、これに対し、ハマンは憤り、モルデカイだけでなく、モルデカイの民族を根絶やしにしようとした。3:7にそれが、クセルクセス王の第十二年の第一の月であったと書かれているので、エステルが王妃になったのは第七年の第十の月だから4年以上の歳月が流れている。

法令を作るのが大好きな帝国の割には、ユダヤ人を皆殺しにする月をくじ引きで決めているのは笑える。国家的な処刑の日がくじ引きとは、今はとても考えられないが、旧約聖書には、くじ引きの結果が神の御心を表すと考えていたふしもある。参考)箴言16:33 くじは膝に投げられるが、そのすべての決定は【主】から来る。

そして、ハマンの立てたユダヤ人根絶やし計画にクセルクセス王はOKを出してしまう。(参考3:9 王様。もしよろしければ、彼らを滅ぼすようにと書いてください。私はその仕事をする者たちに銀一万タラントを量って渡します。そうして、それを王の宝物庫に納めさせましょう。)こうして、ハマンはこの金額を使って、ユダヤ人虐殺計画を実行に移すこととなる。さらに・・・(参考3:13 書簡は急使によって王のすべての州へ送られた。それには、第十二の月、すなわちアダルの月の十三日の一日のうちに、若い者も年寄りも、子どもも女も、すべてのユダヤ人を根絶やしにし、殺害し、滅ぼし、彼らの家財をかすめ奪えとあった。)

以上がエステル記4章のいきさつ。

#### 4章

ハマンが推奨し、王がOKを出して法令となったユダヤ人根絶やし計画を知ったモルデカイの反応

1,モルデカイは、なされたすべてのことを知った。モルデカイは衣を引き裂き、粗布をまとい、灰をかぶり、大声で激しくわめき叫びながら都の真ん中に出て行った。

2,そして王の門の前のところまで来た。王の門の中には、粗布をまとったままでは入ることができなかったのである。

モルデカイは、「なされたすべてのことを知った」とあるので、一部始終熟知した上の行動だ。「衣を引き裂き、粗布をまとい、灰をかぶり、大声で激しくわめき叫びながら都の真ん中に出て行った」悲しみを表すユダヤ人の典型的な姿を見ることができる。モルデカイは門のところで王の宮殿の仕事をしていたのに、粗布をまとった状態では、王の仕事ができる状態ではない。

### 他のユダヤ人たちの反応

3,王の命令とその法令が届いたどの州においても、ユダヤ人の間には大きな悲しみがあり、断食と泣き声と嘆きが起こり、多くの人たちは粗布をまとって灰の上に座った。概ねモルデカイと同じ悲しみの反応だが、モルデカイほどドラマチックに書かれていない。この計画の原因となったのがモルデカイなので、その分責任を感じていたのかもしれない。

### エステルの反応

4,エステルの侍女たちとその宦官たちが入って来て、彼女にこのことを告げたので、王妃は非常に痛み苦しんだ。彼女はモルデカイに衣服を送り、それを着せて、粗布を脱がせようとしたが、彼はそれを受け取らなかった。

5,エステルは、王の宦官の一人で、王が彼女に仕えさせるために任命していたハタクを呼び寄せ、モルデカイのところへ行って、これはどういうわけか、また何のためかと聞いて来るように命じた。

先ずエステルが聞いた情報は、おじが「衣を引き裂き、粗布をまとい、灰をかぶり、大声で激しくわめき叫びながら都の真ん中に出て行った」という事実だけだったようだ。一国の王妃になったエステルは、自由に宮殿の外に出ることができるわけではない。このため、ハタクに服を託してモルデカイのところに遣わした。モルデカイはエステルから送られた服を受け取らず、粗布を着たままだった。

ところで、エステルは伯父モルデカイとの関係を誰にも言わなかったのだろうが、エステルは自分で宮殿の外に行くことができる身ではないので、当然誰かに頼まなくてはならず、その相手はハタクであった。しかもハタクは王の宦官の一人。いくらエステルが詳しい事情を言わなかったにせよ、モルデカイとエステルの間に何らかの関係があることは気づいていたはず。しかし、ハタクはそれを王様や王様の取り巻きにペラペラしゃべったとは考えられない。ここでも、神はハタクをしてエステルに良くしていることが想像できる。きちんと神が配置してくださっている人がいたわけだ。

### お使いに出たハタク

6,ハタクは王の門の前の、町の広場にいるモルデカイのところに出て行った。

粗布をまとっていたモルデカイは宮殿に入れなかったので、王の門の前の町の広場にいた。そこにハタクは行った。

7,モルデカイは自分の身に起こったことをすべて彼に告げ、ハマーンがユダヤ人を滅ぼすために王の宝物庫に納めると約束した、正確な金額も告げた。

エステルから送られてきたハタクに対しモルデカイは詳しく説明し「自分の身に起こったことをすべて」「正確な金額も告げた」。なので、この時点で少なくともハタクはモルデカイとエステルの関係を知っていたし、エステルがユダヤ人であることもばれていたはず。

8,また、ユダヤ人を根絶やしにするためにスサで発布された法令の文書の写しを彼に渡した。それは、エステルに見せて事情を知らせ、そして彼女が王のところに行って、自分の民族のために王からのあわれみを乞い求めるように、彼女に命じるためであった。

法令の文書の写しをエステルに見せて、王のところに行って、「自分の民族のために」王の所に行って、憐れみを請い求めるように頼んだ。

9,ハタクは帰って来て、モルデカイの伝言をエステルに告げた。

ハタクは忠実にエステルにモルデカイの伝言を告げている。このような人がいるので、ユダヤ人は助かったのだ。(イスラエル人が窮地に立たされている時、異邦人なのにそれを助けている人が聖書の中には結構出てくる。ヨシュア記のエリコの町のラハブなど)

### 再びハタクはお使いに出る

10,エステルはハタクに命じて、モルデカイにこう伝えた。

11,「王の家臣たちも王の諸州の民も、だれでも知っているように、召されないのに奥の中庭に入って王のところに行く者は、男でも女でも死刑に処せられるという法令があります。ただし、王がその人に金の笏を差し伸ばせば、その人は生きながらえます。私はこの三十日間、まだ王のところへ行くようにと召されていません。」

3章からもわかるが、エステルが王妃になってから4年以上が経過している。それに美人コンテストもあれから何度か行われた可能性だってある。この時点で1か月も王様とはご無沙汰だった。

エステルは自分が王から召されないのに奥の中庭に入って王のところに行けば、死刑に処せられるという法令があるので、自由に王に会うことができないことを伝えた。この国は本当に法令が好きなの国のようだ。例外は、王が金の笏を差し伸ばしてくれた場合。そして、最後にエステルが王に召されたのは30日までであることもハタクを通して伝えた。王様のお気に入りではない可能性が高くなっていると。

12,彼がエステルのことばをモルデカイに告げると、

### モルデカイからエステルへの返事

13,モルデカイはエステルに返事を送って言った。「あなたは、すべてのユダヤ人から離れて王宮にいるので助かるだろう、と考えてはいけない。

14,もし、あなたがこのようなときに沈黙を守るなら、別のところから助けと救いがユダヤ人のために起こるだろう。しかし、あなたも、あなたの父の家も滅びるだろう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」

モルデカイはエステルに対し警告する。王宮にいるから助かるなんて、ケチな考えをしてはいけないと。「別のところから助けと救いがユダヤ人のために起こるだろう。」というモルデカイの言葉が彼の信仰を表しているのなら、物凄い信仰だ。これまでの神からの預言を熟知していたということになる。神の計画、エステルに対する召命を全うしないのであればエステルだけでなく、父の家も滅びてしまうことを警告する。

### 再びエステルからモルデカイへの返事

15,エステルはモルデカイに返事を送って言った。

16,「行って、スサにいるユダヤ人をみな集め、私のために断食してください。三日三晩、食べたり飲んだりしないようにしてください。私も私の侍女たちも、同じように断食します。そのようにしたうえで、法令に背くことですが、私は王のところへ参ります。私は、死ななければならないのでしたら死にます。」

養父モルデカイの言葉を聞いたエステルは、死を覚悟して王のところに行く決心する。そして、その旨をハタクを通してモルデカイに伝える。しかし、エステルが自分の力で行こうとしたのではないことが分かる。

モルデカイに対し、王のおひざ元スサにいるユダヤ人を集めて、断食するようにお願いした。自分のために祈るようにと執り成しの祈りをお願いする。そして、自分も自分の侍女も同じように断食して神に祈って王のところに行くと言った。結果をこうしてほしいと決めつけるのではなく、御心を求める余裕がエステルにあったのはすごい。神の御心が「死ななければならないのでしたら死にます。」とエステルは腹をくくった決心を伝える。エステルが神と親しい祈りの生活を持っていることが分かる。

17,モルデカイは出て行って、エステルが彼に頼んだとおりにした。

エステルの決心を聞いたモルデカイはエステルのお願いを実行した。モルデカイはユダヤ人を取りまとめることができる程の影響のある人であったことが分かるし、モルデカイの信仰もまたスサでディアスポラ生活をしてきたユダヤ人も、苦しい時の神頼みなのかもしれないが、自分たちを代表して王に嘆願に行こうとしているエステルのために、ともに祈ったことが分かる。

### モルデカイの行動をどう思うか

### エステルの行動をどう思うか

4章において今回新しく気づいたこと、学んだこと(自分に当てはめて、適用できること)